

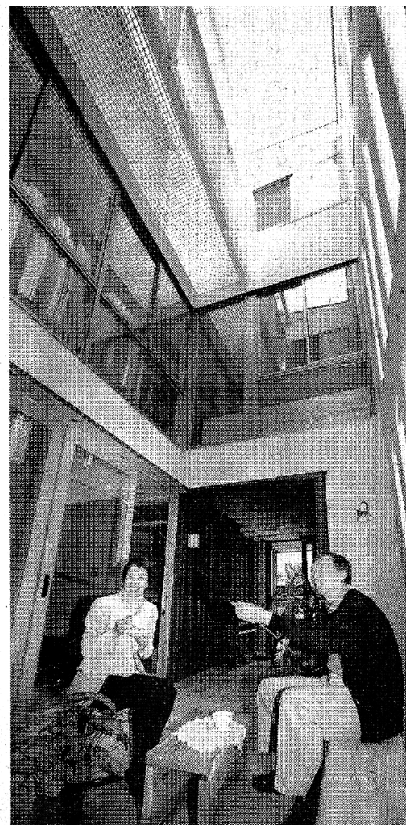
大阪市旭区の千林商店街にほど近い住宅街の一角に、京町家を思わせる真新しい家がある。引き戸を開けて玄関を奥へ進むと、突然頭上に青空が現れた。四方を壁に囲まれた家の中に、6畳間ほどの中庭がある。

「友達を招いて、ここで酒でも酌み交わしたいなあ」。家の主、米倉秀典さん(55)が言うと、妻の京子さん(57)が「お月さんも見えるしね」と相づちを打つ。2人が建て替えたばかりの城だ。

延べ床面積128平方メートルの鉄骨3階建て。中庭に隣接する浴室は、ゆったりと足を伸ばせる広さにした。2、3階の床にはクリと杉の木を使い、天井には土佐和紙を張った。壁は、温かみのある土佐漆喰の塗り壁だ。多くの窓から明るい日の光が注ぎ込む。

築70年の2階建て長屋だった。結婚と同時に住んで約30年。長男(28)、長女(22)の成長に一喜一憂し、たくさんの思い出が詰まった家。しかし、部屋は暗く、風通しも悪かった。雨漏りもした。

建て替えを決意したのは昨年8月。「元氣な今のうちに行動しないと、この家で人生の最期を迎えることになってしまふ。かけがえのない家で



青空が見える中庭でくつろぐ米倉秀典さん(右)、京子さん夫婦(大阪市旭区で)

## 中庭で友人と月見酒を

自然素材、注ぎ込む陽光… 築70年の長屋 新生

設立した任意団体。現在、約150事業所が加盟しており、施工の依頼を受ければ、加盟事業所が家を建てる。これまで約150棟を建築。そのどれもがすてきだった。木を多用した住宅に、落ち着いた雰囲気を感じた。

京子さんは早速、研究会を訪ね、「建て替えプロジェクト」が始動した。「靴のまま入れて、人が集まれるスペースを作れないか」「明るい部屋がいい」「できるだけ自然素材を使ってほしい」。設計者に様々な要望を伝えた。設計が決まるまでに作成された図面は12通りに上った。それだけで9か月が過ぎた。

工事が始まったのは今年5月。2人とも仕事帰りに立ち寄っては、立ち上がっていく骨組みを見て、棚やコンセン卜の位置も確認した。工務店の担当者と一緒に漆喰の色あいを選んだ。

家族の思いをいっぱい取り入れた家は、先月末に完成、今月15日に入居した。

2人は、これからの暮らしに思いを巡らしている。数年前の秀典さんの退職後も、友人たちが気軽に集まれる家にしよう、家族4人、夜空を眺めながら語り合う時間を持つう……。夢が広がっていく。

はあるけれど、それはどうしても嫌だった」と、京子さんは語る。

ちょうどそのころ、住宅関連雑誌で「暮らし方研究会」(事務局・大阪市北区)を知った。

設計事務所や工務店、建材メーカーなどが、住まいの提言をするために1992年に